

資料紹介

山口県下関市中ノ浜遺跡出土の土笛について

鷹野 あきこ

はじめに

本稿で紹介する資料は、東京教育大学が発掘調査を行い、現在筑波大学が所蔵する山口県下関市中ノ浜遺跡から出土した弥生時代の土笛1点である。土笛が墓地遺跡で出土した例は本例以外では堀部第1遺跡の1例のみであり、土笛が当時の社会においてどのように使用されたかを検討する上で有益なものとなろう。本稿は中ノ浜遺跡から出土した土笛資料を図化、報告するとともに、同様に墓地遺跡から土笛が出土した堀部第1遺跡の例を参照しながら、土笛を保有する集団、また土笛の使用について若干の考察を加えるものである。

I. 弥生時代の土笛に関する研究小史

土笛とは、弥生時代前期末から中期前葉にかけてみられる中空の土製品である。器形は倒卵形を呈し上部に直径2～3cmほどの開口部をもち、体部には小孔が前面に4か所、背面に2か所穿たれたものが標準的な形態となる。

日本において初めて発見された土笛は、1966年に山口県下関市綾羅木郷遺跡の土坑（EⅢ地区L.N.34）から出土した。（国分1968）この土製品を笛として断定し、発表したのが国分直一である。国分は綾羅木郷遺跡から出土した資料について、「中国古代の陶埙にその形と指孔の状況が酷似している」との理由からこの土製品が中国に起源をもつ「陶埙」にプロトタイプが見いだせるという見解を示した（国分1968）。これが弥生時代における土笛の研究の端緒となり、以来弥生時代において土笛の存在が認識されるようになる。国分が土笛を楽器として紹介したことにより、土笛を巡る議論は土笛が楽器としてどのような音を奏でたかを主軸として行われることとなる。そのため、考古学だけでなく音楽学の立場からも様々な議論や検証がなされた。その中で問題となったのが、粘土という可塑性に富む素材にも関わらず、開口部が大きく吹奏に適さない資料がほとんどであるという点である。この問題については、楽器的功能の形骸化などの背景が指摘された（国分1981など）。そこで注目されるのが長崎県原の辻遺跡の漂着ココヤシである。原の辻遺跡から出土したココヤシは1点が弥生中期、1点が弥生後期に帰属し土笛より時期がくだるが、形態や土笛特有の縦走文とココヤシ内果皮の筋などに類似点が見て取れることから、漂着ココヤシの模倣品である説が示されている（近藤2000など）。

これまで出土した資料については、破片資料が多く一部判別が難しいものも多くあるが、本報告を含め現在までに30遺跡で118例が確認される。帰属時期は弥生前期前葉から中期前葉であり、分布は西日本の日本海沿岸部の遺跡から出土し、その分布が独特の貝殻施文をもつ綾

羅木系土器の分布と重なることが指摘されている（荒山 2014）。ただし，出土する遺跡グループ間には空隙が見られ，分布を整理すると玄界灘沿岸部の宗像地域，響灘沿岸の関門地域，宍道湖・中海周辺地域，鳥取市域，丹後半島周辺地域に分けられる。割合を見ると，宍道湖・中野海周辺地域が遺跡数と出土数ともに最も多く，特に朝酌川下流域に所在する西川津遺跡・タテチョウ遺跡の2遺跡だけで全出土数の約半数を占める。

Ⅱ．中ノ浜遺跡について

1. 遺跡の立地と調査の経緯

中ノ浜遺跡は山口県下関市豊浦町川棚字中ノ浜に所在する遺跡である。遺跡の立地する下関市豊浦町川棚地区は，この地方を流れる川棚川の浸食により開析された低湿地が広がっており，川棚川下流域の北側には低湿地の中央部に東西に連なる砂丘が連なる。砂丘の規模は東西約700m，遺跡付近の幅は130mであり，中ノ浜遺跡が位置するのはこの砂丘の西半の部分にあたる部分である（第1図）。山口県の西端部，響灘に面した沿岸地域には旧石器時代から古代・中世にわたる遺跡が密集しており，中ノ浜遺跡と前後する時期に形成された遺跡としては，綾羅木郷遺跡・梶栗浜遺跡・吉母浜遺跡・土井ヶ浜遺跡をはじめとして，下関市域から大津郡域にかけて海岸沿いの洪積段丘や沖積平地に多くの遺跡が展開する（山口県 2000 など）。

1960年，金関丈夫を団長とした無田地方総合研究調査団により，川棚川流域海岸平野一帯についての調査が行われた（国分 1961）。その際，かねてから中ノ浜の砂丘から土器片が出土するとの情報が調査団にもたらされ，これを受けて最初の中ノ浜遺跡の調査が行われることとなった。第一次調査以降，計11次に渡る発掘調査が行われているが，そのなかでも弥生時代の墳墓が検出されているのは第1回から第1次～第9次調査区である。

このうち第1次調査を無田地方総合研究調査団（国分 1961），第2次から第4次調査を広島大学，第5次から第8次調査を東京教育大学を主体とする合同調査団がそれぞれ調査を実施し



第1図 中ノ浜遺跡の立地

ている（豊浦町教育委員会 1983）。また第9次調査を豊浦町教育委員会及び山口県埋蔵文化財センターが行っている（豊浦町教育委員会 1985）（第2図）。

2. 遺跡の特色

中ノ浜遺跡は弥生時代前期の共同墓地としては山口県内で最古期のものであり、弥生時代の埋葬習俗や社会構成、地域性などを解明する上で極めて重要な遺跡である。

遺構については、通算9次にわたる発掘調査によって、箱式石棺墓44基・土壙墓34基以上・置石墓12基・配石墓1基・覆石墓1基・土器棺墓9基・支石墓様遺構1基・集石遺構若干などの埋葬遺構が検出された。中ノ浜遺跡の埋葬施設の中で最も割合が多いのが石材を利用した箱式石棺墓であり、他にも置石墓、配石墓、支石墓状遺構など、地上標石を伴う埋葬施設も多い。このような埋葬施設において石材を多用する傾向は中ノ浜遺跡に特徴的な要素であると指摘されており、同じく弥生時代の大規模集団遺跡の土井ヶ浜遺跡と比較すると、土井ヶ浜遺跡の石材を利用した埋葬遺構が1割に留まるのに対して、中ノ浜遺跡の石材を利用した埋葬遺構は全体の6割にも及ぶ（小林 2011, 下関市烏山民俗資料館 2010）。

また、遺構に伴い少なくとも103体以上の弥生時代人骨が出土しているが、出土した弥生人



第2図 調査区位置図（第2次～9次調査）

骨は高顔・高身長 of 形質的特徴をもつ「北部九州・山口」型のグループに属する。響灘沿岸地域の砂丘上に営まれた弥生墓地からは人骨が多数出土するが、最も出土数が多い土井ヶ浜遺跡では約 300 体の弥生人骨が出土している。両者を比較すると、土井ヶ浜人骨については、北部九州の甕棺から出土する弥生人骨と共通の特徴を有しており、縄文の特徴を強く残した西北九州の弥生人とは異なることから、「渡来系」弥生人と評される。一方で、中ノ浜弥生人は高顔・高身長の渡来的特徴を有しながらも響灘沿岸地域の土井ヶ浜人よりも、在来の縄文人的形質が強く認められる（豊浦町教育委員会 1983）。

遺物について、現在報告されているものについては弥生土器の他、細形銅剣・銅戈・石剣・石戈・打製石鏃・磨製石鏃・袋状鉄斧・碧玉製管玉・硬玉製小玉・貝製（ゴホウラ・イモガイ・二枚貝）腕輪・貝製小玉・鹿角性指輪などがみられる。特に、中ノ浜遺跡において、副葬や供献された土器類のうち、山形重弧文で飾られた精製の小型壺が主に弥生時代中期の遺構に伴い出土する（豊浦町教育委員会 1983）。

Ⅲ．中ノ浜遺跡出土の土笛

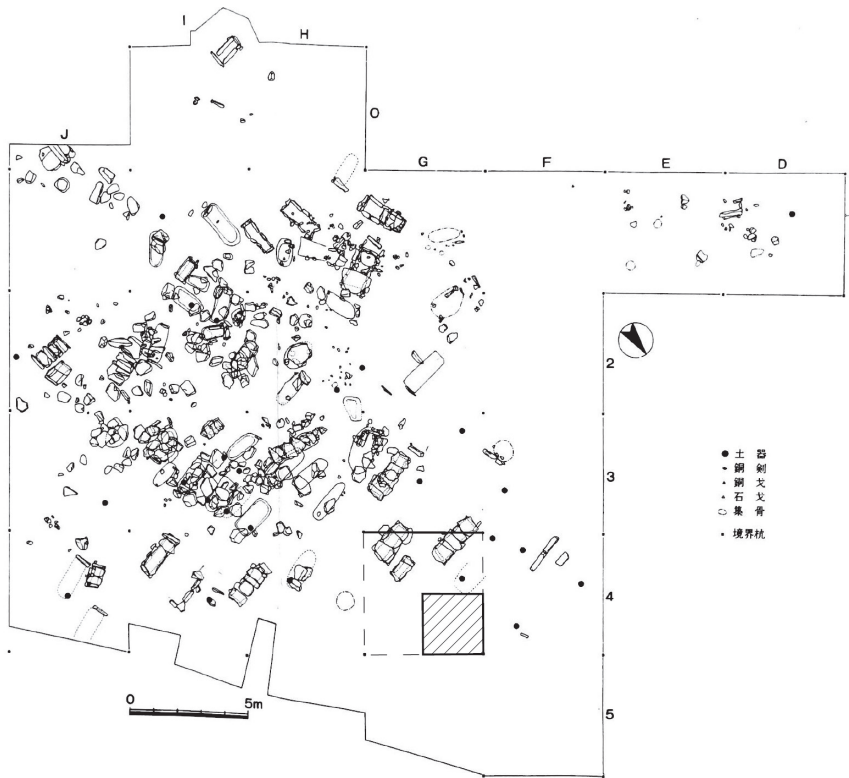
1. 土笛の出土状況

東京教育大学を中心として実施された第 5 次～第 8 次発掘調査においては、遺跡全域に 5m 方眼のグリッドが設定され、それに基づく面的な発掘が進められた（豊浦町教育委員会 1983）。調査では遺跡南半部を占める現代墓地、また広島大学による発掘区の広がり等が考慮され、N-127° -E の方位を基線方向としてグリッドが設定されている。これらのグリッドは、海側（北西側）から南東にむけてアルファベット順の記号を、南西側から北東に向けて数字記号を付け、この 2 つの組み合わせによって位置が表現される（第 3 図）。中ノ浜遺跡出土の土笛は、注記と遺物台帳を照らし合わせたところ 1968 年の調査で出土したものであると明らかになった。

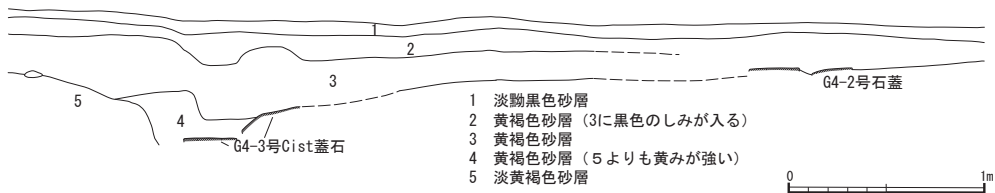
出土地点は G-4 区であり、遺物台帳によると「(地表面より) - 104 くらいのレベルで、淡黄褐色砂の直上、G-5・F-4 方面四分の一のところは石多し その付近よりの出土」との記載がある。出土状況については大まかな地点の記載のみであり、細かな出土状況については不明である。ただし、付近に埋葬遺構のない場所からの出土であるため、石棺などに直接埋葬遺構へ供献あるいは副葬していたものである可能性は低いと推察される。

G-4 区における東西方向の基本的な層序については、5～10 cm の厚さの淡黝黒色砂層が表層を形成し、次に 20 cm～40 cm の厚みの黄褐色砂層（この層の上部に暗褐色のしみ込み層が一部認められる）があり、この下に淡黄褐色砂層が続く。弥生土器などの遺物は黄褐色砂層中に集中して認められ、表層の淡黝黒色砂層からもわずかながら採集される（第 4 図）（国分ほか 1968）。

G-4 区において土笛が出土したと考えられる場所の南西では、黄褐色砂層中で完形土器が 1 点出土しており、その周辺には広く大腿骨・骨盤などの骨片が散在していた。土笛がこれらに直接関係するものであるか不明であるが、これらの集骨及び土笛付近の集石との関係性につ



第3図 東京教育大学発掘区及び土笛出土場所



第4図 G-4区南壁セクション図

いて、集石が土壙墓に伴う標石としての役割を持っていた可能性も含め検討する必要があるだろう。

2. 土笛の観察

ここでは、中ノ浜遺跡より出土した土笛の観察によって得られた知見をまとめ、先行研究の成果を参照して若干の考察を加えたい。

今回報告する土笛の破片資料は口縁部付近に2つの穿孔が認められ、器体下部に穿孔が確認できない。そのため、おそらく器体背面の破片であると推察される(第5図)。器体は手捏

ねによる成形である。外面はヘラミガキが一部残っており、表面は平滑に整えられる。また、内面はヨコナデが施される。穿孔付近を観察すると、器体の内側に粘土が付着していることから、穿孔については器体を整形した後、焼成前に外側から穿たれたものと考えられる。

胎土は石英粒を多く含む。その他長石や白雲母が観察でき、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色であり、筑波大学が所蔵する中ノ浜遺跡出土の土器片を見てみても、焼成に若干の違いはあるものの胎土に大きな違いは見られない。

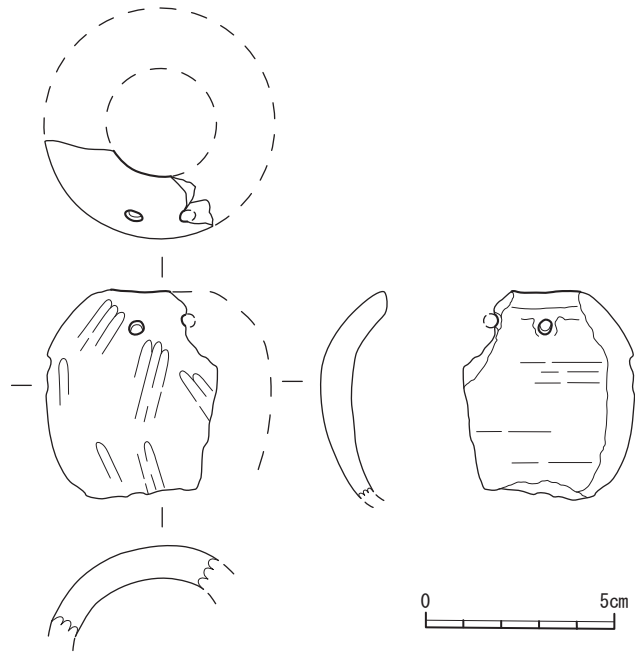
開口部の復原口径は 3.0 cm、胴部最大径は推定 6.2 cm である。体部の穿孔の直径は 4.5 mm であり、確認できる二つの小孔は水平に配されてはいない。器体の底部が欠損しているため、器高や先端の表現については不明である。

これまで出土している土笛については、一部 10 cm を超える大型品が出土するものの、そのほとんどは器高が 5.5 ~ 9.5 cm である（荒山 2014）。東山喜一は器高と胴部最大径が強い相関を持つことを指摘しているが、これに基づくこの土笛は器高 7.5 ~ 9.0 cm 程度と推定される（東山 2000）。

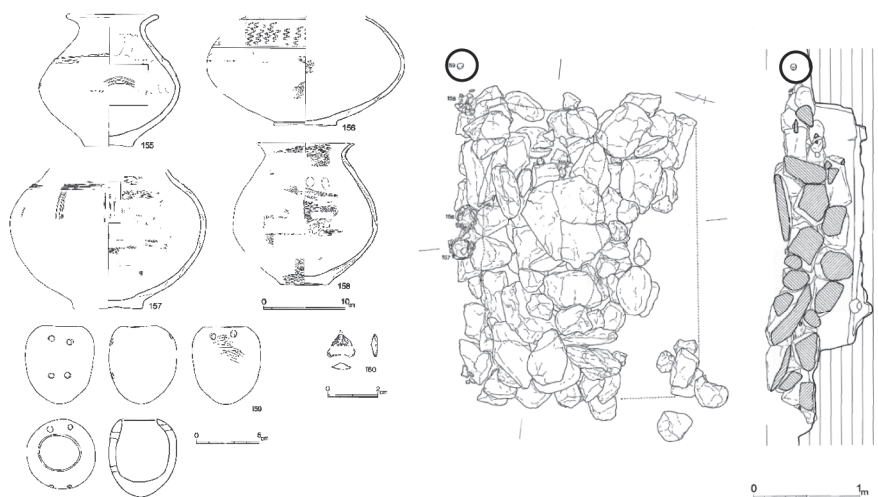
また開口部の大きさについては、しばしば楽器としての用途や原型と絡めて検討がなされる。中ノ浜遺跡出土例については、楽器として使用したと想定する場合、復原口径 3.0 cm という大きさから吹奏は非常に困難であると考えられる。

IV. 墓地遺跡における土笛出土の意義

土笛の出土状況を整理すると、主に土坑（貯蔵用堅穴）、溝・周溝、河川跡、包含層、掘立柱建物の柱穴、墳墓近接などがある。土笛の使用に関しては、主に日本海側で共有された農耕祭祀に関する「マツリ」において使用されたと推定されている（松岡 1969, 釋 1977, 松永 2014 など）。ただし、人間生活に密着した土坑内や溝内からの出土が多いことから、使用された場に関しては死に関する祭祀というよりも集落内祭祀に用いられたものではないかと主張さ



第5図 中ノ浜遺跡出土土笛実測図



第6図 堀部第1遺跡における土笛出土状況

れてきた（釋 1977）。

ここで、現在まで唯一墓地遺跡から出土している島根県堀部第1遺跡の事例について触れ、本事例との関係性について考察を行いたい。堀部第1遺跡は島根県松江市に所在する弥生時代前期を中心とする墓地遺跡である（鹿島町教育委員会 2005）。下部構造として木棺を有する配石墓が60基ほど検出されており、そのほとんどに上部構造である標石が伴うのが特徴である。土笛は配石墓である5号墓北東隅より約30cm離れた旧地表面上から出土しており、棺内副葬品として被葬者に直接的な位置から検出されてはいない（第6図）。付近から土笛が出土した5号墓は墓群中最大規模の標石を持つ。さらに標石に使用された石材についても他の墳墓が基本的に近隣で採取可能な石材を使用するのに対して、5号墓では遺跡から尾根ひとつ越えた日本海沿岸域で産出する大芦御影を使用しており、築造にあたってわざわざ遠方から運搬したものと予想される。加えて、標石に伴い土器が4点出土しており、このうち1点については土笛同様標石の北東隅より検出されている。

堀部第1遺跡について報告書をまとめた徳永隆は、検出された標石墓について、縄文時代の配石墓に堀部第1遺跡の祖型となるものはないとした上で、北部九州と響灘沿岸に所在する墓制と共通点がみられることを述べる（徳永 2005）。また、徳永は特に上部構造の標石は支石墓の影響を多分に受けていることは間違いなく、土器の墓上供献もこれに準ずるものであるとしつつ、上部構造はかなり変容しているが支石墓を祖型とし、下部構造では北部九州の木棺墓を採用したものとして理解するほかないと結論付けている。石材を多用し、さらに一部において支石墓の影響が見て取れる墓制については中ノ浜遺跡も同様の特徴をもつが、このような特徴は本州では限られる。

これまで、土笛の分布は綾羅木系土器の分布域と重なることが指摘されてきたが（荒山 2014）、両者の分布圏を比較すると、北部九州の宗像地域から丹後半島周辺地域までの日本海側を中心に分布しているという点では一致しているものの、土笛の出土遺跡はその中でも極端に限定される。このような限定性の意味を考えるにあたって、材質に希少性をもたない土笛に対して、各地域の限られた管理者によって意図的に希少性が付加されたという土笛の政治的側面についても指摘されている（松永 2014）。これについて墓地遺跡における出土という視点から論を付け加えるならば、堀部第 1 遺跡においては規模や使用石材という点で他の埋葬遺構と比較して卓越している 5 号墓の付近から土笛が出土したということから、遺跡内や小地域内においては有力者の管理の下使用された可能性も十分考えられるだろう。一方で、より広域でみた場合については集団の系譜が関係する可能性について指摘したい。土笛が出土した堀部第 1 遺跡と中ノ浜遺跡において、双方とも本州には珍しく埋葬施設に支石墓の影響が見取れる。このことを踏まえると、土笛が出土する各グループ間の空隙については、埋葬施設として支石墓の上部構造を変容させた標石墓や配石墓などの埋葬形態を有する集団がかかわっている可能性について検討する必要があるだろう。

また、堀部第 1 遺跡出土例と中ノ浜遺跡出土例の双方とも、埋葬遺構に直接副葬・供献されてはならず、あくまで埋葬遺構の付近での出土である。ただし、付近の遺構において土器の供献がみられるなど、一部共通する要素があるのも注目すべき点である。このような小型壺形土器の副葬は、北部九州の前期埋葬遺構に例がみられ、朝鮮半島の埋葬に起源が見られる（中村 2006）。

これまでの土笛の出土状況において、具体的にどのように使用されたかを検討するのは非常に困難であったが、葬送儀礼においての使用については、中ノ浜遺跡例と堀部第 1 遺跡例から、小壺と同時に使用されていたと推定される。ただし、あくまで類似の出土状況が現在 2 例に留まるため、より詳細な使用については今後墓地遺跡で発見される出土状況と共に更なる検討が必要だろう。

おわりに

本稿では、東京教育大学による中ノ浜遺跡の調査により出土した土笛を図化し報告すると共に、若干の考察を加えた。本報告を含め現在まで土笛が墓地遺跡から出土した例は 2 例のみであり、これらを取り上げて安易に考察を行うのは危険であろうが、堀部第 1 遺跡との比較から、土笛保有集団の系譜については、埋葬遺構において石材を多用し、特に上部構造において支石墓の影響を受ける集団が土笛祭祀の文化をもち、それが土笛の分布を広域でみたときの空隙と関係する可能性があること、さらに土笛が埋葬や葬送に関わる祭祀に使用されたと推定する場合、供献小壺と同時に使用されていた可能性があることを述べた。

これまでの土笛研究においては、その楽器としての魅力からか保有する集団や系譜についての十分な検討がなされてこなかった。本稿では、しばしば語られる土笛を有する共通の祭祀の背景として、支石墓に系譜を求められる標石墓や配石墓を有していた集団を挙げたが、墓地遺

跡からの土笛の出土により、今後は墓制や人骨の形質など様々な要素を加えて検討する必要がある。これは土笛の原型や機能、特に中国陶埴の流れを汲んで登場したものか否かを考える上でも重要な視点である。さらに土笛研究の問題点として、器体がシンプルで分類や編年が困難であること、共伴遺物が少なく時期が明らかでないことが挙げられるが、これらの時間的・空間的広がり の推察する手がかりともなるだろう。本資料と今回の考察が今後の土笛研究の進展に少しでも役立てば幸いである。

謝辞

本稿は、2020年度に筑波大学に提出した卒業論文の一部を改稿したものである。卒業論文の執筆にあたり、滝沢 誠先生、常木 晃先生から多くのご指導を賜りました。また、本稿の執筆にあたり、木下正史氏、下関市立考古博物館の小林善也氏、山口県埋蔵文化財センターの河村吉行氏からご教示を頂きました。末筆ながらお礼申し上げます。

註

- 1) 紹介するような土製品に関して「陶埴」、「土笛」、「埴形土製品」などいくつかの呼称があるが、本稿においては2000年代以降の報告書での記載に従い便宜的に「土笛」と呼称する。
- 2) 松岡の復原・吹奏実験を参考とする(松岡1969)。松岡は開口部の大きさを2mmから26mmまでの2mm間隔で11個製作し実験を行い、その結果として大変吹きづらくなるのは26mmのものだと発表している。

参考文献

- 荒山千恵 2014 『音の考古学』 北海道大学出版会。
- 江川幸子 1997 「弥生の土笛」『古代文化研究』 鳥根古代文化センター 17-30頁。
- 鹿島町教育委員会 2005 『堀部第1遺跡』 鹿島町教育委員会。
- 木下正史 1970 「遺跡の発掘と遺物の処理」『郷土史研究講座1 郷土研究と考古学』朝倉書店 250-256頁。
- 国分直一 1961 「無田遺跡と周辺の諸遺跡」『山口県文化財概報』4号。
- 国分直一 1967 「下関市綾羅木郷台地遺跡」『考古学ジャーナル』1 ニューサイエンス社 17-21頁。
- 国分直一・岩崎卓也・木下正史 1968 「山口県豊浦郡豊浦町川棚中ノ浜の埋葬遺跡調査概報」『大塚考古』8号 1-12頁。
- 国分直一・伊藤照雄・木下尚子 1988 「中ノ浜遺跡の弥生時代前期埋葬—第一次調査報告」『地域文化研究』第3号 梅光女学院大学。
- 国分直一 1968 「陶埴の発見」『日本民族と南島文化』金関丈夫博士号記念委員会。
- 国分直一 1979 「弥生陶埴」『弥生の土笛 よみがえった埋蔵文化財“綾羅木郷台地”』 赤関書房 17-53頁。
- 国分直一 1980 『弥生の土笛』びえりす企画集団。
- 国分直一 1981 「第3章 陶埴とその変容」『綾羅木郷遺跡発掘調査報告書』 下関市教育委員会 586-595頁。
- 小林善也 2011 「響灘の墓と集落—土井ヶ浜遺跡とその周辺—」『弥生文化の始まり—土井ヶ浜遺跡と響灘周辺—』大阪府立弥生文化博物館 78-93頁。
- 近藤直美 2000 「日本の陶埴—最新出土状況に基づく報告—(発表要旨)」『日本音楽学会関東支部通信』53 日本音楽学会関東支部

- 下関市烏山民俗資料館 2010 『響灘の奥津城 1—中ノ浜遺跡—』
- 釋 龍雄 1977 「陶埴について」『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 195-207 頁.
- 田畑直彦 1999 「綾羅木式土器と阿方式土器」『山口大学文学会誌』49 巻 263-264 頁.
- 田畑直彦 2003 「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念事業会』47-72 頁.
- 徳永 隆 2005 「第 6 章結語」『堀部第 1 遺跡』鹿島町教育委員会 170-176 頁.
- 豊浦町教育委員会 1983 『史跡 中ノ浜遺跡』豊浦町教育委員会.
- 豊浦町教育委員会 1985 『中ノ浜遺跡 第 9 次発掘調査概報』豊浦町教育委員会.
- 豊浦町史編纂委員会 1982 『豊浦町史 二』豊浦町役場.
- 中ノ浜遺跡発掘調査団 1971 『山口県中ノ浜遺跡発掘調査概報』.
- 中村大介 2006 「弥生時代開始期における副葬習慣の受容」『日本考古学』13 巻 21 号 21-54 頁.
- 西岡信雄 1984 「埴の器形と奏法」『大阪音楽大学音楽研究所年報』第 2 巻 51-83 頁.
- 東山喜一 2000 「弥生の土笛 その起源と変遷」『天理大学考古学研究室紀要 古事』4 天理大学考古学研究室 1-22 頁.
- 前島己基 1979 「弥生時代の鳴物二題土笛と石製銅鐸舌の新資料」『季刊文化財』36-42 頁.
- 松岡敏行 1969 「下関市綾羅木郷遺跡出土陶埴の復原と実験」『考古学ジャーナル』38 ニューサイエンス社 4-5 頁
- 松永通明 2014 「4. 土笛と把手付方形台付鉢について」『香葉遺跡第 2 地点』福津市教育委員会 35-39 頁.
- 山口県 2000 『山口県史 資料編 考古 1』
- 吉瀬勝康 1983 「山口県綾羅木郷遺跡出土の弥生土器」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室 81-114 頁.

図版出典

- 第 1 図 地理院地図をもとに筆者作成。
- 第 2 図 豊浦町教育委員会 1985 より引用
- 第 3 図 山口県 2000 を一部改変。
- 第 4 図 原図（1968 年中ノ浜発掘調査団作成）より筆者再トレース。
- 第 5 図 筆者実測・作成。
- 第 6 図 鹿島町教育委員会 2005 を一部改変。

鷹野あきこ（筑波大学大学院）